

公立大学法人 横浜市立大学
YOKOHAMA CITY UNIVERSITY

～事例報告～

はじめに 横浜市立大学の沿革と概要

1. 特別選抜における英語資格要件の整備
2. 「指定校推薦入試」について
3. 「社会人入試」「国際バカロレア入試」
「科学オリンピック入試」の導入
4. 入試改革におけるアドミッションズセンターの役割

横浜市立大学 アドミッションズセンター 出光 直樹
(2015/8/27 平成27年度 入学者選抜実務担当者協議会)

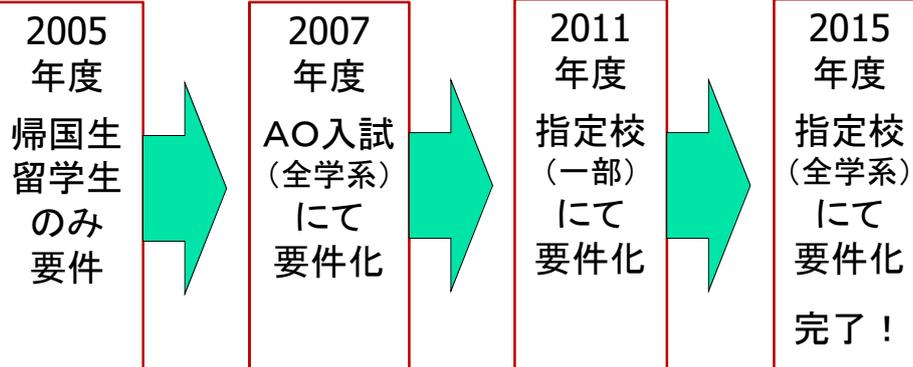


はじめに 横浜市立大学の沿革と概要

- 2005(平成17)年度法人化。
 - 商学部・国際文化学部・理学部を改組し、国際総合科学部に統合。
 - 医学部には従前からの医学科とともに、看護短期大学部を改組した看護学科が加わる。
 - 必修の全学英語科目「Practical English (PE)」を開講。TOEFL-ITP500(TOEIC600、英検準1級も可)を単位認定要件に。
- 入試課からアドミッションズセンターへ
 - 基本的には“課”としての事務組織。
 - アドミッションズセンター長は、教員管理職としての扱い。

1. 特別選抜における 英語資格要件の整備

- 特別選抜入試において、出願要件として包括的に英語資格を要件化。



- PE (TOEFL-ITP500) のカリキュラムポリシーが明確であることが、アドミッションポリシーに反映。
- 志願者レベルの底上げ。
- 指定校推薦では、高校間の実力差の補正機能も。

【個人的印象】

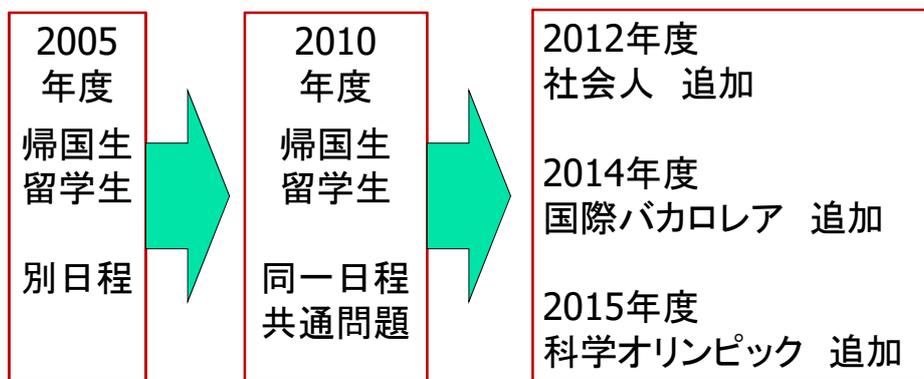
- 日本の高校出身者の場合、英検2級レベルに到達している者は基本的な学習力が身につけている傾向。
- 英語資格水準の高い海外帰国生入試では、2技能のTOEIC受験者よりも、4技能のTOEFL-iBTやIELTS受験者の方が、入試のパフォーマンスが良い傾向。

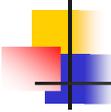
2. 「指定校推薦入試」について

- 2005年の法人化・学部改組にともない新規導入
 - 国際総合科学部の募集人員の約22%、医学部看護学科では30%を占める。
 - 高校との信頼関係に基づき、原則として全員合格。入学後の成績は最も良い集団。
- 応募実績や入学後の成績追跡調査などをふまえて、運用。

3. 「社会人入試」「国際バカロレア入試」「科学オリンピック入試」の導入

- プロフィール設定(看板化)と、共通試験問題・面接試験による一発勝負、の組み合わせ





4. 入試改革におけるアドミッションズ センター(アドミッション課)の役割

- 志願者や入学者に関わる各種データの蓄積や分析。内外の政策動向の情報収集。これらを基にした企画立案。
- 入試改革の成否は、事務局の力量次第。

平成 27 年度 入学者選抜実務担当者協議会 ～事例報告～

出光 直樹（横浜市立大学）

はじめに 横浜市立大学の沿革と概要

- 1871(明治 4)年:仮病院、1882(明治 15)年:横浜商法学校、1928(昭和 3)年:横浜市立横浜商業専門学校(旧制)、1944(昭和 19)年:横浜市立医学専門学校(旧制)、1947(昭和 22)年:横浜医科大学(旧制)
- 1949(昭和 24)年:横浜市立大学商学部、1952(昭和 27)年:医学部、文理学部、1995(平成 7)年:国際文化学部・理学部(文理学部の改組)、看護短期大学部
- 2005 年度より法人化(理事長・学長分離型)。商学部・国際文化学部・理学部を改組し、国際総合科学部に統合。医学部には従前からの医学科とともに、看護短期大学部を改組した看護学科が加わる。
- 必修の全学英语科目「Practical English (PE)」を開講し、TOEFL-ITP500(TOEIC600、英検準 1 級も可)を単位認定要件とし、この科目の修得が進級(国際総合科学部)or 卒業要件(医学部)要件に。
- 事務系の固有職員は、法人化前後に数名の専門職を採用。固有の一般職員は 2006 年より定期採用を開始。法人化後数年は固有の管理職採用も。
- 「入試課」から「アドミッションズセンター」へ
 - 2005 年度当初の課長 1、係長 1、職員 4 は全員市派遣職員。年度途中でプロパーの専門職 1 と職員 1 が加わる。
 - 現在、課長 1、係長 2、専門職 1、職員 4(全員プロパー) + 派遣スタッフ 1
 - 2011 年度より事務機構上の名称はアドミッション課に。
 - アドミッションズセンター長は当初は不在。追って事務系の部長の兼務の後、2008 年 1 月～2009 年 3 月は副学長が兼任。2009 年 4 月以降は学部教員が就任。

1. 特別選抜における英語資格要件の整備【資料 1】

- (1) 一般選抜(センター試験+2次試験)および公募推薦(センター試験利用)を除き、特別選抜入試において、出願要件として包括的に英語資格を要件化。
 - ① 指定校推薦は、国際総合科学部の募集人員の約 22%、医学部看護学科では 30%を占める。
 - 高校との信頼関係に基づき、原則として全員合格。
 - 入学後の成績は最も良い集団。
 - ② AO入試は国際総合科学部で約 7%を募集。
 - 「書類審査」→「面接」の 2 段階での選抜。
 - ③ 特別入試(海外帰国生・国際バカロレア・科学オリンピック・外国人留学生・社会人)は、国際総合科学部で若干名募集。
 - 共通の試験問題+面接での選抜。

- (2) 英語資格要件導入の背景;
- ① 学部改組1期生の指定校推薦やAO入学者に、PE不振者が目立った。
 - ② 5倍を超えるようなAO入試の志願者数の適正化と学力把握。
 - ③ 推薦指定校の学校間格差。高校での成績がトップクラスでも、一部に英語力不足の者の存在が露呈。
- (3) 導入のプロセス;
- ① 最初は級・スコアの定め無しで導入し、英語資格と可否の傾向や入学後の成績を見ながら徐々に引き上げ。志願者減少の懸念等に対しては、データにより説得し、“提出がのぞましい”との妥協案も。
 - ② 当初は TOEFL、TOEIC、英検の3種のみであったが、高校現場の普及に着目して、G-TEC for STUDENTS を追加。また単位認定要件資格への追加に対応して、2015 年度より IELTS も入試での対象資格に追加。

2. 「指定校推薦入試」について【資料2】

- 2005 年の法人化・学部改組にともない新規導入。
 - 当初の推薦指定校は、旧学部の公募推薦入試(センター試験を課さない・横浜市民のみ応募可)の入学実績に応じて配分。
- 2008 年度以降、応募実績や入学後の成績追跡調査などをふまえた見直しを開始。
- 入学後の成績が良いこともあり、2009 年度以降は横浜市民の条件を撤廃。

3. 「社会人入試」「国際バカロレア入試」「科学オリンピック入試」の導入【資料3】

- 2005 年度の国際総合科学部発足時は「海外帰国生入試」と「外国人留学生」の2区分(別日程)で特別入試を実施。2010 年度に同一日程共通問題での実施にした後、2012 年度に「社会人」、2014 年度に「国際バカロレア」、そして 2015 年度に「科学オリンピック」の区分を追加。
- 特定のバックグラウンドを持った志願者を取り組むために、その特質を名称に含む看板を掲げつつ、選抜そのものは共通の試験問題と面接をベースに行う。

4. 入試改革におけるアドミッションズセンター(アドミッション課)の役割

- 志願者や入学者に関わる各種データの蓄積や分析。内外の政策動向の情報収集。これらを基にした企画立案。

資料1 特別選抜における英語資格に関する出願要件の変遷

資料2 指定校推薦入試 <前編> <中編> <後編> (個人執筆のエッセイ)

資料3 同じ試験問題で多様な特別入試 <前編> <後編> (個人執筆のエッセイ)

別冊資料 『横浜市立大学 平成 28 年度 入学者選抜要項』

【報告者プロフィール】 <http://www.idemitsu.info>

桜美林大学職員(大学教育研究所、アドミッションセンター)を経て、2005 年 9 月より横浜市立大学。

2014 年 4 月からは桜美林大学大学院 大学アドミニストレーション研究科で授業科目『大学アドミッション』も非常勤講師として担当。

資料 1

特別選抜における英語資格に関する出願要件の変遷

平成 27 年 4 月現在

平成 17 (2005) 年度入試

- 国際総合科学部の発足

	国際教養学系	経営科学系	理学系
指定校	提出不要		
AO	提出不要		
帰国生	TOEFL-PBT423、TOEIC425		
留学生	TOEFL-PBT423、TOEIC425		

平成 19 (2007) 年度入試

- AO入試において、英語資格の提出を義務化
- 指定校において、TOEFL460 (CBT140)、TOEIC500、または英検 2 級を有し、公式な証明書を提出できる者は、被推薦資格の評定平均値“4.0 以上”を“3.5 以上”と読みかえることが出来る旨の特例を設定。

	国際教養学系	経営科学系	理学系
指定校	提出不要		
AO	要提出 (級不問)		
帰国生	TOEFL-PBT423、TOEIC425		
留学生	TOEFL-PBT423、TOEIC425		

平成 21 (2009) 年度入試

- 帰国生・留学生の水準を引き上げ。

	国際教養学系	経営科学系	理学系
指定校	提出不要		
AO	要提出 (級不問)		
帰国生	<u>TOEFL-PBT460 (iBT48)、TOEIC500</u>		
留学生	<u>TOEFL-PBT443 (iBT43)、TOEIC460</u>		

平成 22 (2010) 年度入試

- AO (国際教養学系・経営科学系) で水準を設定。
- 医学部看護学科で指定校の導入

	国際教養学系	経営科学系	理学系	看護学科
指定校	提出不要			提出不要
AO	<u>TOEFL417 相当</u>		要提出 (級不問)	
帰国生	TOEFL-PBT460 (iBT48)、TOEIC500			
留学生	TOEFL-PBT443 (iBT43)、TOEIC460			

TOEFL417 相当： TOEFL-PBT417 (iBT35)、TOEIC400、英検準 2 級

平成23（2011）年度入試

- 指定校（国際教養学系）、A O（国際教養学系、理学系）、帰国生（国際教養学系、経営科学系）の水準を引き上げ。
- 帰国生（理学系）で英検も対象に含める（水準は同一）。

	国際教養学系	経営科学系	理学系	看護学科
指定校	<u>要提出（級不問）</u>	提出不要		提出不要
A O	<u>TOEFL460 相当</u>	TOEFL417 相当	<u>TOEFL417 相当</u>	
帰国生	<u>TOEFL500 相当</u>		<u>TOEFL460 相当</u>	
留学生	TOEFL-PBT443（iBT43）、TOEIC460			

TOEFL500 相当： TOEFL-PBT500（iBT61）、TOEIC600、英検準1級

TOEFL460 相当： TOEFL-PBT460（iBT48）、TOEIC500、英検2級

TOEFL417 相当： TOEFL-PBT417（iBT35）、TOEIC400、英検準2級

平成24（2012）年度入試

- 指定校（国際教養学系・経営科学系）、A O（経営科学系）、留学生の水準を引き上げ。
- 社会人選抜の新設。
- GTEC for STUDENTS を対応資格に追加。

	国際教養学系	経営科学系	理学系	看護学科
指定校	<u>TOEFL417 相当</u>	<u>要提出（級不問）</u>	提出不要	提出不要
A O	TOEFL460 相当	<u>TOEFL460 相当</u>	TOEFL417 相当	
帰国生	TOEFL500 相当		TOEFL460 相当	
留学生	<u>TOEFL460 相当</u>			
社会人	<u>TOEFL500 相当（但し GTEC-St を除く）</u>			

TOEFL500 相当： TOEFL-PBT500（iBT61）、TOEIC600、GTEC-St700、英検準1級

TOEFL460 相当： TOEFL-PBT460（iBT48）、TOEIC500、GTEC-St600、英検2級

TOEFL417 相当： TOEFL-PBT417（iBT35）、TOEIC400、GTEC-St500、英検準2級

平成25（2013）年度入試

- 国際都市学系の新設。
- 指定校（理学系）について、必須ではないが提出が望ましいとする。
- 指定校（看護学科）について、要提出（級不問）
- 留学生（国際教養学系・国際都市学系）、の水準を引き上げ。

	国際教養学系 国際都市学系	経営科学系	理学系	看護学科
指定校	TOEFL417 相当	要提出（級不問）	<u>望ましい</u>	<u>要提出（級不問）</u>
A O	TOEFL460 相当		TOEFL417 相当	
帰国生	TOEFL500 相当		TOEFL460 相当	
留学生	<u>TOEFL500 相当</u>	TOEFL460 相当		
社会人	TOEFL500 相当（但し GTEC-St を除く）			

TOEFL500 相当： TOEFL-PBT500（iBT61）、TOEIC600、GTEC-St700、英検準1級

TOEFL460 相当： TOEFL-PBT460（iBT48）、TOEIC500、GTEC-St600、英検2級

TOEFL417 相当： TOEFL-PBT417（iBT35）、TOEIC400、GTEC-St500、英検準2級

平成26（2014）年度入試

- 指定校（看護学科）の水準を引き上げ
- 国際バカロレア（IB）入試の新設

	国際教養学系 国際都市学系	経営科学系	理学系	看護学科
指定校	TOEFL417相当	要提出（級不問）	望ましい	TOEFL417相当
AO	TOEFL460相当		TOEFL417相当	
帰国生	TOEFL500相当		TOEFL460相当	
IB				
留学生	TOEFL500相当	TOEFL460相当		
社会人	TOEFL500相当（但し GTEC-St を除く）			

TOEFL500相当： TOEFL-PBT500 (iBT61)、TOEIC600、GTEC-St700、英検準1級
 TOEFL460相当： TOEFL-PBT460 (iBT48)、TOEIC500、GTEC-St600、英検2級
 TOEFL417相当： TOEFL-PBT417 (iBT35)、TOEIC400、GTEC-St500、英検準2級

平成27（2015）年度入試

- 対象資格に IELTS を追加
- 指定校（国際教養系・国際都市系・経営科学系・理学系）の水準を引き上げ
- AO入試（理学系）の水準を引き上げ
- 科学オリンピック入試の新設

	国際教養学系 国際都市学系	経営科学系	理学系	看護学科
指定校	TOEFL460相当	TOEFL417相当		TOEFL417相当
AO	TOEFL460相当		TOEFL460相当	
帰国生	TOEFL500相当		TOEFL460相当	
IB				
科学 オリンピック			TOEFL417相当	
留学生	TOEFL500相当	TOEFL460相当		
社会人	TOEFL500相当（但し GTEC-St を除く）			

TOEFL500相当： TOEFL-PBT500 (iBT61)、TOEIC600、GTEC-St700、英検準1級
IELTS5.0 (アカデミック・モジュール各パート 4.5 以上)
 TOEFL460相当： TOEFL-PBT460 (iBT48)、TOEIC500、GTEC-St600、英検2級
IELTS4.5 (アカデミック・モジュール各パート 4.0 以上)
 TOEFL417相当： TOEFL-PBT417 (iBT35)、TOEIC400、GTEC-St500、英検準2級
IELTS4.0 (アカデミック・モジュール各パート 3.5 以上)

平成28(2015)年度入試

- 特別推薦(医学科)の新設。
- AO入試(経営科学系)において、数学科目履修の有無により水準に差を設ける。
- 科学オリンピック入試において、コンテストの成績により水準に差を設ける。

	国際教養学系 国際都市学系	経営科学系	理学系	(医学科) (看護学科)
指定校	TOEFL460相当	TOEFL417相当		(看護学科) TOEFL417相当
特別推薦				(医学科) TOEFL460相当
AO	TOEFL460相当	<u>TOEFL460相当</u> または※1 <u>TOEFL500相当</u>	TOEFL460相当	
帰国生 IB	TOEFL500相当		TOEFL460相当	
科学 オリンピック			<u>TOEFL417相当</u> または※2 <u>TOEFL460相当</u>	
留学生	TOEFL500相当	TOEFL460相当		
社会人	TOEFL500相当(但しGTEC-Stを除く)			

※1 日本の高校で「数学Ⅰ」「数学A」「数学Ⅱ」「数学B」4科目、
または「数学Ⅰ」「数学A」「簿記」「財務会計Ⅰ」4科目を修得(見込)の現役・
1浪生はTOEFL460相当、それ以外の者はTOEFL500相当

※2 「全国物理コンテスト 第1チャレンジ」「化学グランプリ 一次選考」または
「日本生物学オリンピック 予選」のいずれかを通過した者はTOEFL417相当、
平均点(物理の課題実験はBC評価)以上の成績を修めた者はTOEFL460相当

TOEFL500相当: TOEFL-PBT500 (iBT61)、TOEIC600、GTEC-St700、英検準1級
IELTS5.0 (アカデミック・モジュール各パート4.5以上)

TOEFL460相当: TOEFL-PBT460 (iBT48)、TOEIC500、GTEC-St600、英検2級
IELTS4.5 (アカデミック・モジュール各パート4.0以上)

TOEFL417相当: TOEFL-PBT417 (iBT35)、TOEIC400、GTEC-St500、英検準2級
IELTS4.0 (アカデミック・モジュール各パート3.5以上)

資料2

FMICS（高等教育問題研究会）会報『BIG EGG』2013年12月号 掲載

指定校推薦入試＜前編＞

小春日和の陽気に恵まれた11月23日（土祝）、横浜市立大学では指定校制の推薦入試（国際総合科学部と医学部看護学科が対象で、医学部医学科は対象外）が行われ、地元の神奈川県を中心に北海道から沖縄まで全国各地から集まった181名の受験生が、面接に臨みました。

高校からの推薦に基づいて出願する「推薦入試」は、公募制と指定校制に2つに大別されます。

公募制では、大学の定める条件を満たした者はどの高校からでも出願可能で（ただし高校毎の人数の上限や、地域等の縛りがある場合もある）、基本的には競争試験として不合格となる場合もあるという前提で行われます。高校からの推薦が不要な自己推薦入試と呼ばれるものも、高校による制限が無い競争試験という性格は同様です。

それに対して指定校制の場合は、大学から推薦枠が指定された高校からの出願に限定されますが、大学の定める条件を満たして高校から推薦された生徒は、合格（そして入学）することが前提のもとに受験して、よほどの事がない限りは不合格にならないというのが一般的です。

実際、横浜市立大学では指定校制推薦入試を実施して10年目になりますが、今まで不合格者を出したことはありません。ただ面接時の態度等に気になる点があり、後日高校側に事情を質したことは何回かあります。他大学の例では、欠席や遅刻、またあまりにも志望理由がいい加減ということで不合格にした例を聞いたことがありますが、一部の例外（私立医大など）を除き、合格を前提として行われます。

では指定校制推薦入試の面接の様子はどうかという、合格が前提だからといって気の抜けた態度で臨む受験生は、横浜市立大学の場合はほぼ皆無です。逆に多くの受験生がとても緊張した面持ちで臨み、毎年見ていてとても微笑ましいものです。国際総合科学部では、5～7名の受験者で50分の集団面接を行うため、面接終了後には緊張感から解放された受験生同士が仲良く談笑し、連絡先を交換する姿も見受けられます。医学部看護学科では15分程の個人面接で実施しますが、こちらはやはり臨床分野に進む覚悟と適性を見定めようと厳しめの質疑になることもあってか、面接終了時に涙ぐんでしまう者も、たまにみうけられたりします。

ちなみに、国公立大学で指定校制推薦入試を実施している大学は珍しく、管見の限りでは、国立大学で指定校推薦入試を実施しているところは皆無、公立大学でも一部の大学でのみ実施され、推薦入試と言えば公募制が主流です。ところが横浜市立大学では、公募制推薦は国際総合科学部にてセンター試験利用の形式で実施していますが、募集人員の割合は5%に過ぎません。それに対して指定校推薦は、国際総合科学部で23%、医学部看護学科で30%と、募集人員のかかなりの割合を占めるのです。

指定校推薦入試＜中編＞

国際総合科学部で147名（650名中の約23%）、医学部看護学科で30名（100名中の30%）と、募集人員のかなりの割合を占める横浜市立大学の指定校制推薦入試。初めて導入されたのは、平成17年に国際総合科学部が設置された時に遡ります。国際総合科学部は、従前の商学部、国際文化学部、理学部を統合改組して設置されました。母体となったこれらの旧学部では、公募制推薦入試（センター試験を利用しないスタイル）を実施しており、学部改組にともなってこれを全て指定校制に切り替えたのが始まりです。

医学部看護学科は、平成17年に従前の看護短期大学部を改組して設置されました。短期大学部では公募制推薦入試を実施していたものの、改組後の医学部看護学科は、一般入試のみでの募集となります。しかし平成22年度より10名（当時は80名中の約13%）の募集人員で指定校推薦入試を導入し、その後割合を増加して現在に至ります。ちなみに医学部医学科においては、今も昔も一般入試のみで学生募集をおこなっています。

私が横浜市立大学に着任したのは、すでに国際総合科学部の1期生が入学した後であり、従前の公募制推薦入試をなぜ指定校制に切り替えたのか、その理由は謎にまつまれているのですが、公募制推薦入試の競争的性格（高校から推薦されても不合格となりうる）を嫌った事が、その理由の1つであったと聞いています。従前の公募制推薦入試では（導入直後の指定校制推薦入試でも）、志願者本人及び扶養義務者が共に横浜市民であることが要件の1つに課されておりました。そのため応募してくる高校については、公立高校では当時の学区制度から横浜市内所在の高校に限定され、私立高校については学区の縛りはないものの、やはり横浜市内とその周辺地域所在の高校に限られていました。このように地域の高校との密接な関係のもとで推薦入試が行われていたことが、指定校制に切り替えた背景の1つであったようです。

平成17年度入試で指定校制推薦入試を導入した際、高校への推薦枠の配分は、従前の公募制推薦入試の入学実績に応じてなされました。初年度の募集人員の割合は650名中の100名（約15%）、平成18～20年度までは110名（約16%）で推移します。そして平成21年度には145名（約22%）と、ほぼ現在と同じ割合に増加させ、それとともに横浜市民に限定していた出願要件を撤廃し、また神奈川県外の高校にも推薦枠を広げます。続いて平成22年度入試では、医学部看護学科にも指定校制推薦入試が導入されました。

これらの背景には、数年間の入学者の追跡調査の結果、指定校推薦入試入学者の大学入学後の成績等が、一般入試を含む他の入試方式の入学者よりも優れている傾向が現れていた事がありました。

指定校推薦入試＜後編＞

平成17年度の法人化・学部改組の1期生が3年生となる平成19年頃より、大学入学後の成績等の追跡調査を行い入試区分別の分析を始めました。以来これらのデータなどを元に、指定校・推薦枠の見直しや入試制度全体の検討を行っています。集計する指標は、履修科目の成績、修得単位数、必修英語科目 Practical English（原則として TOEFL-ITP500 が単位修得要件で、この科目の修得が国際総合科学部の3年次進級要件）の合格状況、などです。

集計を始めた当初から現在に至るまで指定校推薦の入学者に見られる特徴は、大学での履修科目の平均成績は高く、しかも修得単位数も多いという事でした。イメージとしては真面目で優等生タイプの学生が多く、この点は出身高校のレベルに関係なく共通して見られます。

ただし TOEFL が要件に課されている Practical English の合格率については、一般入試入学者と同程度か少し低い傾向にあります。またこれに関しては出身高校間の差がそれなりに現れ、当初の指定校の中には、入学後の TOEFL をなかなかクリア出来ないことから成績不振者や退学者などが相次ぎ、指定廃止となった学校もありました。

とは言え、全体的に見れば指定校推薦の入学者は、一般入試を含むどの入試区分よりも入学後のパフォーマンスが良い傾向にありました。こうしたデータも踏まえて、前回記した通り指定校推薦入試の募集人員を増やすとともに、広く優秀な学生を確保し横浜市立大学の認知度を上げることも狙いとして、横浜市民に限定していた出願要件は撤廃して神奈川県外の高校も推薦枠を広げてきました。

導入時は従前の公募制推薦入試による入学実績によって配分した推薦枠ですが、導入後の見直しについては、当該推薦枠に対する応募状況や入学後の成績状況、一般入試やAO入試の入学実績などに基づいて行っています。例年5月頃に前年度までのデータにより検討を行い、6月末に対象高校宛てに通知しています。またその際には、入学者の大学での成績状況などもお知らせしています。

被推薦資格は、高校での評定平均値が所定の基準以上である事を基本としていますが、客観的な学力水準の指標にすべく、平成23年度入試より分野ごとに英語資格（TOEFL・TOEIC・英検など）の提出も求め始め、徐々にその要件を上げてきています。

指定校制推薦入試は、特定の高校に枠が限定される事や、一方には安易な進学・進路決定を誘発する点などに批判もありましょう。しかしご紹介してきたように、高校と大学との信頼関係に基づいて優秀な学生を受け入れる事が出来れば、高大連携の1つのカタチとして、一定の意義と役割があると思っています。

資料3

FMICS（高等教育問題研究会）会報 『BIG EGG』2014年11月号 掲載

同じ試験問題で多様な特別入試＜前編＞

去る10月28日の火曜日、横浜市立大学では2015年度入試の先陣を切って、国際総合科学部（国際教養学系・国際都市学系・経営科学系・理学系）のAO入試、海外帰国生入試、外国人留学生入試、社会人入試、国際バカロレア入試、そして科学オリンピック入試の合格発表を行いました。

実に6種類もの入試ではありますが、実際のプロセスはAO入試とその他5種類の特別入試の2つに大別されます。AO入試は、9月8日(月)～10日(水)に156名が出願してまず一次書類審査を行い、10月3日(金)に84名の一次合格者を発表。10月18日(土)に82名が二次面接審査を受験し、49名が合格となりました。

その他の特別入試の方は、9月16日(火)～18日(木)に97名が出願し、10月11日(土)に小論文試験と面接に74名が臨み、39名（帰29、留3、社0、国6、科1）が合格となりました。これらの特別入試には5種類の区分があると言っても、中身は4つの学系毎に同じ試験問題を使用しています。小論文試験（90分）の内容は、文系の3学系では2つの大問から成り、1つは日本語で書かれた課題文、もう1つは英語で書かれた課題文を読んでいくつかの設問に答えるスタイルです。理学系では必須の英語に加えて、物理・化学・生物から2分野選択という内容です。

各区分とも出願に際しては一定水準以上のTOEFL・TOEIC等の英語資格が必要で、その他に外国人留学生では「日本留学試験」の所定の科目で平均点以上の成績、国際バカロレアではディプロマ資格の取得(見込)、科学オリンピックでは第1段階のコンテスト(物理・化学・生物何れか)の通過という要件が必要ですが、これらの資格等の要件は一定の水準にある者を出願段階で抽出するために設定しており、それ以上の成績の差は直接的には合否判定に影響しません。

合否判定基準は、試験日に実施する小論文（配点100点）と面接（配点100点）の合計点としています。募集人員は学部全体の650名の中の若干名（各学系・区分とも）という扱いであるため、募集枠を埋めるために点数の低い者を無理に合格させる事は無く、一方で現状の出願者数であれば無理に合格者数を絞る必要も無く、基本的に絶対的な視点から小論文と面接を評価して合否を決めています。

私が2005年9月に横浜市立大学に着任した当時は、社会人・国際バカロレア・科学オリンピックの区分は無く、海外帰国生と外国人留学生も別の日程（すなわち別の試験問題）で行っていましたが、2010年度から2つの区分を同一日程で行うとともに、2012年度に社会人、2014年度に国際バカロレア、そして今シーズン2015年度には科学オリンピック（理学系のみ募集）の区分を追加してきました。

同じ試験問題で多様な特別入試＜後編＞

海外帰国生、外国人留学生、社会人、国際バカロレア、そして科学オリンピックという多様な特別入試を、分野（横浜市立大学では国際総合科学部の4つの学系）毎に同一の試験問題で実施してきたことには、2つのねらいがあります。

1つは、特定のバックグラウンドを持った志願者を取り組むためには、その特質を名称に含む看板を掲げる事が、マーケティングとして効果的だからです。例えば、2005年度から実施しているAO入試では、社会人経験も評価すると募集要項に明示されているものの、AO入試という名称では、社会人にはそれが自分を対象とした入試区分とはほとんど認知されず、社会人の志願者数は2～3年に1人程度しかありませんでした。

そこで、既に共通の小論文試験と面接で実施していた海外帰国生入試・外国人留学生入試の枠組みに、25歳以上でTOEFL500相当の英語資格を有する者を対象とした社会人入試という区分を2012年度より追加したところ、狙い通りに毎年数名の社会人志願者が得られるようになりました。後に続く国際バカロレア入試（2014年度）、科学オリンピック入試（2015年度）についても、やはり明確な看板を掲げる事でこれらの特質をもった多様な志願者を得ることが出来たのです。

2点目は、そうした様々な特質に着目するにしても、最終的な合否判断は共通の試験問題と面接をベースに行うことにより、最小限の実施負担で導入が可能になるという事です。つまり、ある程度の特質（年齢、国籍、海外での学習経験、国際バカロレア資格、科学オリンピックの成績、日本留学試験の成績、TOEFL等の英語資格など）を有していれば、その中身の優劣・差異についてそれ以上は問わず、最終的には入試日に実施する共通の筆記試験と面接という“一発勝負”で合否を決める訳です。また一発勝負という仕組みである事により、合否判断に関わる合意が得やすいとともに、志願者にとっても準備すべき内容が判りやすいという側面もあります。

様々なプロフィールを持った志願者に同じ試験問題を課すこと自体は、入学後の教育が同一であるのならば不自然な事ではありません。また入試区分毎に得点状況に差が現れたとしても、その他の指標（面接の評価や出願資格の内容など）を考慮して区分毎にボーダーラインを判断をすれば良いのです。

大学入試を巡る議論では、一発勝負の試験により1点差で合否を決める事について、否定的に語られる事があります。確かにそれだけが加熱する事には問題はありますが、全て否定されるべきものではないでしょう。各大学の環境に応じた合理的な制度設計が大事だと思います。